

## 形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係

著者	津留崎 由紀子
雑誌名	日本語科学
巻	13
ページ	7-32
発行年	2003-04
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002100">http://doi.org/10.15084/00002100</a>

# 形容詞の中止形を用いた複文における先行句節 と後続句節の関係

津留崎 由紀子

(フェリス女学院大学)

## キーワード

形容詞, 時間的局在性, 主観性, 相対性, ク中止形とクテ中止形

## 要 旨

本稿では、形容詞の品詞としての性格と、その中止形の表す関係の意味との関係を考察する。時間的局在性の観点からみると、形容詞は、時間軸上のデキゴトのうちの状態や一時的存在と、時間軸上に局在しない特徴のうちの恒常的存在や特性、関係を表す。また、形容詞は語り手の主観を表し、意味の中に相対性を含む。形容詞の品詞としてのこれらの性格は、形容詞の中止形が後続する句や節に対して表す関係の意味にも反映される。本稿では、形容詞の中止形の表す関係の意味を〈並列〉〈前提〉〈先行事態〉〈原因〉(〈先行原因〉〈条件〉〈根拠〉)〈注釈〉〈解説〉(〈関係解説〉〈原理解説〉)〈評価〉〈副状態〉に分類した。形容詞の中止形と動詞の中止形の異なる点は、形容詞が運動を表さないため、中止形が〈先行事態〉を表す例が少ないこと、語り手の主観を表すため、後続句節のコトガラに対する語り手の心的態度を表す成分に近い〈注釈〉〈解説〉〈評価〉などを表す中止形の例があること、〈関係解説〉を表す形容詞の中止形に、相対性の現れである比較表現が用いられることなどである。

## 0. はじめに

中止形は、文中に複数の述語が並ぶとき、文末述語でないことを示す語形である。文中に複数の述語を含む複文には、「から」や「ので」、「が」のように、先行する句や節(先行句節とする)と後続する句や節(後続句節とする)の関係を明示するものもあるが、中止形には後続句節との関係は明示されない。中止形を含む先行句節と後続句節との関係は、中止形となる語の形態や意味、構文的要素など、さまざまな要因によって異なる。中止形の研究は主に動詞を中心に進められてきたが、中止形の表す関係の意味の全体像を明らかにするために、本稿では形容詞に焦点を絞って、中止形が文中でどのような関係の意味を表すのか、それらの関係の意味が形容詞の品詞性とどのように関わっているのかを明らかにする。また、関係の意味成立の要因についても考察する。

## 1. 中止形についての先行研究と問題点

中止形が後続句節に対して表す関係の意味についての研究は、大きく三種に分類できる。まず、関係の意味の代表的なものをあげ、それらの相違点を探るもの、第二に、既存の分類に当てはま

らない例をあげ、それらの特徴を詳しく考察するもの、第三に、多くの用例を収集し、先行句節の後続句節に対する関係の意味を詳細に分類記述するものである。

第一の研究では、仁田(1995)が、先行研究の多くが認めている動詞の中止形の用法を、①付帯状況、継起(②時間的継起、③起因的継起)、④並列という三類四種にまとめている。さらに、中間的な例もあげながら、用法間関係を述べている。以下は仁田(1995)からの引用例である。

①痩せた男は腰を浮かしてドアを見つめていた。(筒井康隆「その情報は暗号」)

②娘はにこやかに言って、忙しそうに彼の前から立ち去った。(佐木隆三「ジャンケンボン協定」)

③倉庫番が、背の高い男につつかれて喚いた。(「ジャンケンボン協定」)

④上の子が幼稚園に入って、下の娘がやっと歩き出した頃だった。(三浦朱門「借老同穴」)

関係の意味の違いにより、先行句節の後続句節に対する従属度が異なることは、南(1964)以来、論じられている。南(1964)は、従属句を従属度の高いAから従属度の低いDの4段階に分け、～テの形の句うち、状態・様子を表すテ1「首ヲカシゲテ走ル」をA段階、並列的または継起的なテ2「戸ヲバタントシメテ出テイッテシマッタ」と原因・理由を表すテ3「カゼヲヒイテ休ミマシタ」をB段階、テ4(意味的な説明はない)「A社ハタブン今秋新機種ヲ発表スル予定デアリマシテ、～」をC段階とする。従属度を特に取り上げた研究には、加藤(1995)、吉永(1995)がある。加藤(1995)は①～④に、モダリティ成分となった⑤発言のモダリティを、吉永(1995)は付帯状況よりさらに従属化の進んだ⑥手段を加える。⑤は加藤(1995)⑥は吉永(1995)の引用例である。

⑤正直に言って、私は両親にはあまりいいたくありません。(村上春樹「ノルウェーの森・上」)

⑥歩いて学校へ行く。(吉永による作例と思われる。)

吉永(1995)は形容詞、加藤(1995)は形容詞と述語名詞も対象にしていると述べるが、二人とも動詞の中止形の用法をもとに、形容詞や述語名詞の中止形に動詞の中止形と同様の枠をはめているのみで、形容詞や述語名詞の中止形独自の用法についての言及はない。

第二の研究は、大鹿(1985)、白川(1990)、吉田(1996)である。大鹿(1985)は、存在を表す動詞や状態性の述語の中止形の先行・後続句節に、時間的な先後関係のないさまざまな関係があることを指摘し、「ある」などの存在を表す動詞や状態性述語の中止形が、後述する〈前提〉を表すことを見出している。動詞の多くは動的な運動を表すため、「ある」のような状態性の動詞の中止形の例は見出されにくかったであろう。白川(1990)は、「テ形・連用形の節の中には、(略)意味的には、独立文とほぼ同等の完結性を備えたものがある。」として「独立性の高いテ形・連用形」と名づけている。以下、白川(1990)から引用する。

⑦現在、私の机の上に、玉の井界隈の詳細を極めた地図があって、これは滝田ゆう手書きのものである。(吉行淳之介「街角の煙草屋までの旅」)

⑧この宗匠はなかなかきびしくて、連衆の差し出す付け句をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ。(丸谷才一「低空飛行」)

白川(1990)は、「a.モダリティを表わす助動詞(の一部)、b.判断形容表現、c.「ある」「いる」など」の中止形が「独立性の高いテ形・連用形」を作りやすいと述べる。「判断形容表現」という

語は草薙(1978)によるが、草薙(1978)は形容詞を情報提供という観点から分類し、そのうち、「判断形容表現」を話し手の主観的な判断を下す表現としている。これはまさに、従来の関係の意味の分類に収まりきれないとされた中止形の用法が、ある種の形容詞の中止形の用例に多く見出されることを示唆している。白川(1990)は用例の特徴をよくとらえているが、異なる種類の用例と一緒に論じている(後述するが、本稿では、⑦は〈前提〉に、⑧は〈注釈〉に分類している)。

また、これらの例と従来の分類との関係づけはせず、特殊な述語に見出される特殊な中止形の用法としている。吉田(1996)も、「言い換え前触れのテ形」という従来の中止形の分類にない用法を指摘するが、「並列の横に、コブのように位置している別種の用法」とし、位置づけに迷っている。これは、動詞の中止形だけを見ていたのでは、動詞に現れにくい中止形の用法を見落とすことになり、それらの用法を正しく位置づけることが難しいということを物語っている。

第三の、中止形の多くの用例を詳細に分類する記述的な研究には、言語学研究会(1989a, 1989b)と、全(1996)がある。言語学研究会は、動詞のシ中止形とシテ中止形を別のもので分類し、それぞれの中止形動詞と文末動詞の意味的な関係を詳細に記述している。全(1996)は、理論的な枠組みを高橋(1983)によっている。高橋(1983)は、動詞のシテ中止形を例として、言語の構造と意味と機能の相互関係を論じるものである。本来、先行句節の述語という基本的な機能をもつ動詞の中止形は、後続句節が陳述の中心であるという文の構造によって、原因や手段といった他の機能を合わせもつようになり、他の機能のみをもつ別の品詞へと移行していくという。移行の過程の中で、中止形の文中での機能と中止形を用いた文の構造と動詞の中止形の語彙の意味が相互に影響し合い、変化していくと述べる<sup>1)</sup>。この理論に基づき、全(1996)は、動詞の二つの中止形の用例を、述語の機能を主とするものから述語性が希薄になり文の拡大成分へと移行したものへ、という順に並べ、構文論的観点から考察を加えている。しかし、これら第三の研究は、分類が詳細である分、細分化された用例同士の関係がわかりにくいという難点がある。

以上から、中止形の先行研究の問題点が明らかになったものと思う。動詞の中止形が表す関係の意味についてはある程度明らかになったが、形容詞、述語名詞の中止形がどのような関係の意味を表すのかについてはほとんど研究がない。しかし、中止形となる語の品詞の性格が異なれば、中心的な関係の意味も異なることが予想される。川端(1958)は、すでに「形容詞的判断性」をもつ前句と後句の関係が動詞の中止形の場合と異なると述べている。中止形の表す関係の意味全体を見通すためには、品詞別に中止形が表す関係の意味を整理し、中止形の表す関係の意味全体の外延を明らかにすること、中止形となる語の品詞の違いによる特徴を探ること、品詞によらず、ある特徴をもつ語に共通する中止形の用法を抽出することが必要であると考え。関係の意味の違いが後続句節への従属度とどのように関係しているかについても、高橋(1983)が、本来、先行句節の述語である中止形が述語性を失っていくと述べる過程をたどることによって考察していく。関係の意味間の関係を明らかにする形で、分類した用例を記述していきたい。

ところで、形容詞には〜くて〜くてという二つの中止形があり、二つの中止形にはどちらか一方しか使えないという場合がある。次の例は、くて中止形は問題ないが、く中止形は非文となる。

・花子は(うれしくて／\*うれしく)泣き出した。

二つの中止形の違いについて、先行研究にはまだ指摘がないようである。形容詞の二つの中止形が述語性を失い、後続句節へ従属していく過程を別個にみていく中で、考察していく。

## 2. 形容詞という品詞の性格

本稿では、中止形に関わる形容詞の性格を、時間的局在性、主観性、相対性の点から考える。形容詞が主に主体の特性と状態を表し、話し手の主観性を含み、意味の中に相対性を含むことは、形容詞の中止形の性格とも関わりが深い。ここでは、形容詞のこれらの性格を先行研究によって確認し、本稿での立場を述べる。

### 2.1. 時間的局在性

本稿では、奥田(1996)、佐藤(1997)、工藤(2001)をもとに、文の表す対象的な内容(=コトガラ)を、以下のように、時間軸上に局在するデキゴトと時間軸上に局在しない恒常的な特徴に分ける。

デキゴト			特徴			
運動(動作・変化)	状態	一時的存在	恒常的存在	特性	関係	質

動詞が主に運動を表し、名詞が主に質を表すのに対し、形容詞は主に中間的な状態や特性を表す。形容詞は属性形容詞と感情形容詞という語彙の意味による分類が広く行われているが、普通、属性形容詞文はモノゴトに備わっている特徴を表すので時間的局在性はなく、感情形容詞文は時間軸上で起こる感情や感覚というデキゴトを表すので時間的局在性がある。しかし、西尾(1972)もすでに述べているように、統語的文脈的条件が関わるため、形容詞の語彙の意味のみから形容詞文の時間的局在性の有無は判断できない。八亀(2001)は、「時間的局所限定」(本稿の時間的局在性)の観点から形容詞文を考察し、主体が個で感情形容詞文である時間的局在性のある文から主体が類で属性形容詞文である「脱時間表現」までを連続相としてとらえ、どのようなときに時間的局在性(アクチュアル性)が増すかという条件を述べている。形容詞文は、後述するように、話し手の主観性が関わるため、話し手の認識と属性主と属性の結びつきのどちらが前面に出るかにより時間的局在性が変化する。形容詞が特性を描いていても、主体の認識時が前面化すれば「このご飯、おいしい。」のように時間的局在性が生まれるし、主語がデキゴトを表す名詞の場合は「雨が激しい。」のように時間軸上のデキゴトを述べる文となる。本稿では、関係や存在を表す語も含めて、形容詞中止形の表す関係の意味と時間的局在性との関わりを考察していく。

### 2.2. 形容詞の主観性

形容詞文には話し手の主観が関わる。八亀(2001)は、特性と状態を表す全ての形容詞文に「評価者」の存在を認め<sup>2</sup>、「評価者」「属性主」「属性」による下のような二重構造を考えている。

話し手「この部屋	きれいだね」	話し手「あなたがいないと	さびしいわ」			
	属性主	属性		属性主	属性	認識レベル
評価者	属性	評価者	属性	評価レベル		

八亀(2001)は、形容詞文は、話し手である「評価者」の主観的判断が入る点が現実をそのまま描写する動詞文と異なり、「評価者」が異なれば同じ現実を異なる表現でとらえることがあると述べる。本稿でも「評価者」の存在を認める。「評価者」は、会話文の話し手や地の文の書き手(以下、両者を含めて語り手とする)であることが多いが、地の文では、用例毎に個別に考察する必要があるだろう。また、八亀(2001)は存在や関係を表す文には言及していないが、筆者は、これらの文では動詞文のように「評価者」が存在しないこともあると考える。「この部屋には時計がない」「(10000円の)この靴は(5000円の)あの靴より高い」などは客観的で、誰が見ても同じ現実を表していることがありうるからである。

### 2.3. 形容詞の相対性

形容詞は、程度副詞で修飾することができ、「この家はあの家より大きい」のような比較表現が成り立つ。これは、形容詞がその意味の中に相対性をもつことによる。比較表現は、語彙の意味によらず複数のモノゴトの関係を表すことになる。「ゾウはクジラより小さい」という文において、「小さい」は小ささ(大きさ)という基準を表しているだけで、「小さい」という特性を表してはいない。「クジラより小さい」全体が、ゾウと他のモノゴト(クジラ)との関係を表している。

ところで、普通の状態や取り立てて特性のない場合を0、極端に異常な状態や際立った特性をもつ場合を10とする0から10までのスケールを考えると、形容詞の意味には0~10の程度性が含まれるが、形容詞文として発せられるのは、語り手が主体の特性や状態の程度が高いと認めたときではないだろうか。「彼女はやさしい」という文は、やさしさのスケールにおいて、1や2ではなく、8以上ぐらいに位置していると認めたときに発せられ、「うれしい」というのも同様に、無感情0から遠く離れたうれしさのときに発せられる。形容詞の程度が低いときや特に高いことを強調したいときには、程度副詞等によってその程度を限定することになる。

### 3. 本稿の考察対象

本稿で対象とするのは、イ形容詞のク中止形とクテ中止形である。筆者は、イ形容詞とナ形容詞は、文法的な性質はほぼ同じと考えるが、イ形容詞はクとクテという二つの中止形がある点で、ナ形容詞とは別に考える必要がある。本稿ではイ形容詞のみについて考察し、形容詞の中止形全体については別の機会に論じたい。したがって、本稿では、形容詞という語はイ形容詞を指す。

また、本稿では、以下のようなものについては対象から除くこととする。

- ・動詞に「たい」がつく複合的なもの。
- ・「ない」が他の語と結びついて固定化し副詞相当になったとみられる「しかたなく(て)、どうしようもなく(て)、まもなく、あてもなく、おかまいなく、間違いなく、まぎれもなく」等。

- ・ 述語形式になったとみられる「こと(が)ない、わけ(が)ない、はず(が)ない」等の中止形。
- ・ 主体や客体の結果状態を表す「柿が赤く色づく」, 「足を高く上げる」等。
- ・ 思考や発言の内容を表す「うれしく思う」「悪く言う」等。
- ・ 動作の様子を詳しくする情態副詞と認められる「速く走る」「はげしくぶつかる」等。
- ・ 「近く」が概量を表す場合「昼近く」「10メートル近く掘った」等。
- ・ 時や場所を表す「朝早く」「夜遅く」「近く(卒業する)」「遠く(へ行く)」「近く(に來る)」等。
- ・ 条件を表す「なくて七癖」「歌手は歌がうまくてはじめて歌手といえる。」等。

用例としてあげる文は、断定形で肯定形の述べたて文を基本とするが、適当な用例がない場合や先行句節と後続句節の關係の意味を保っていると判断されるものについては、独立性の高い節内の例や「のだ文」の例も取り上げることがある。否定形の文については部分的にふれる。

#### 4. 形容詞の中止形の表す關係の意味

本稿では、形容詞の中止形の後続句節に対する關係の意味を、〈並列〉〈前提〉〈先行事態〉〈原因〉(〈先行原因〉〈条件〉〈根拠〉)〈注釈〉〈解説〉(〈關係解説〉〈原理解説〉)〈評価〉〈副状態〉に分類する。これらの關係の意味を表す先行句節は、後続句節に対する從属度がこの順に高くなると考える。本章では、収集した用例をもとに、これらの關係の意味の違いと關係の意味成立の要因を考察する。なお、以下では中止形が後続句節に対して表す關係の意味を〈 〉内に記し、中止形がそのような關係の意味を表す文を《 》によって表す。用例の出典は用例末尾の( )内に記し、出典記述のないものは作例である。また、用例中の[ ]内は、筆者による補足である。

##### 4.1. 〈並列〉を表す形容詞の中止形

###### 4.1.1. 《並列》の特徴

《並列》は、**先行・後続句節が同一主体<sup>3</sup>か異主体かに関わらず、中止形述語と後続述語が意味的にも構文的にも対等である。**したがって、中止形述語と後続述語は、時間的局在性においても、抽象性や評価性においても同種となる。

- (1) 花子は優しくて明るい。
- (2) 花子は優しくて、雪子は明るい。

また、先行・後続句節を入れ換えても意味が変わらない。〈並列〉を表す形容詞の中止形は、先行句節の述語の機能のみしなく、後続句節に対して意味的に独立しているためである。

- (1)' 花子は明るくて優しい。(花子は優しい+花子は明るい)
- (2)' 雪子は明るくて、花子は優しい。(花子は優しい+雪子は明るい)

###### 4.1.2. クテ中止形の表す〈並列〉

- (3) 日本語はムズカシクややこしい。(H)
- (4) 「珊瑚は、ピンクがいちばん高うて、白と紅は値がぐっと下る。…」(おきみ)
- (5) ムームーを着たトミ子の背中では、西陽を受けて白くてピカピカしていた。(だら)

(3) (4) は先行・後続句節ともに主体の特性を述べ、(5) は先行・後続句節ともに時間軸上の状態を述べている。クテ中止形に《並列》の例が少ないためか、異主体の用例は採集できなかった。

#### 4.1.3. ク中止形の表す〈並列〉

(6) この土地の歯科医師は、若く安直で律儀だった。(父)

(7) ライスカレーは大好物だったから、私は惜しく悲しかった。(詫び状)

(8) プロとしての愛情は厳しく、アマのそれは優しい。(数学者)

先行・後続句節において、(6) (8) はともに特性、(7) はともに感情という時間軸上に並存する状態を述べている。ク中止形の用例には、(8) のように先行・後続句節が異主体の例も存在する。

クテ中止形には《並列》の例が少ないが、内省では、クテ中止形とク中止形は交替できる。

#### 4.2. 〈前提〉を表す形容詞の中止形

##### 4.2.1. 《前提》の特徴

《前提》は、後続句節において述べられるコトガラが、先行句節において述べられたコトガラを前提として成り立っている。《並列》同様、先行・後続句節の述語は時間的局在性において同種で、意味的にも独立している。

(9) 花子は顔が丸くて目が大きい。

したがって、先行研究では、《並列》と明確に区別しないものもあるが、《前提》の例は先行句節と後続句節の順序を入れ換えると、不自然になる。

(9)' ? 花子は目が大きくて顔が丸い。

上のように、前提なしに詳細で部分的なコトガラが述べられ、後から概要や全体が述べられることになるためである。コトガラには述べる順序が決まっている場合があり、その順序にしたがって述べられているのが《前提》である。この点で、《前提》は《並列》とは異なっている。

##### 4.2.2. クテ中止形の表す〈前提〉

(10) 鼻の格好で我家の家系図を作ると、父方はスーと鼻筋が通っているが、母方[の鼻]は丸くて小鼻が張っている。(詫び状)

(11) リフトを降りると、眺望は大きくて、そこだけ日の当たっている遠い山脈が、白く光って見えた。(蹉跌)

(12) やってきた地下鉄はとてもハンサムだった。山吹色のボディはたくましくて、チョコレート色の帽子をきちんと冠っていて、誇り高い徽章のような丸いヘッドライトを灯けていた。(地下鉄)

上の例は、順に「鼻」「眺望」「地下鉄」について述べる、同一主体の文と考えられる。いずれも先行句節においては全体、後続句節においてはその部分について述べている。先行・後続句節双方において、(10) は特性、(11) (12) は状態を述べている。(11) は「リフトを降り」た時点、(12)



は「やってきた」時点で語り手が認識した「眺望」や「地下鉄」を描写しているため、先行・後続句節において述べられているコトガラは、時間的局在性をもっている。

#### 4.2.3. ク中止形の表す〈前提〉

(13) 新入生はみな陽気で明るく，まだ高校生のようなあどけなさを残している。(数学者)

(14) 窓の外は暗く，光る夜景がどんどんかけぬけていった。(予感)

(15) 5月の夜気は大そうすがすがしく，二人は道玄坂の人ごみにゆったりと身を委せ、やがて右折して一高生がタナと通称している百貨店へ通ずる急坂を登った。(青)

(13)(14)は同一主体，(15)は異主体の文である。先行・後続句節において，(13)は特性，(14)(15)はデキゴトを述べている。先行・後続句節が，(13)(14)は概容－詳細の順，(15)は状況－状況下の運動という順に並んでいる。普通，周りの状況は運動に先立って述べられるため，形容詞の中止形が状況を主体とする状態を述べて運動の〈前提〉を表す，(15)のような文が多く存在する<sup>4</sup>。

次の例は，先行句節において特性，後続句節において運動が述べられていて，先行・後続句節において同種のコトガラが述べられるという，《前提》の条件を満たしていないようにみえる。

(16) 猿はやせて毛並みが悪く，演技のあい間を盗んでみかんや南京豆をひろってはせわしなく口に入れていた。(予感)

しかし，この例は，語り手が発話時に「猿」の外観とその動作を認識して描写しており，先行・後続句節のコトガラは，時間的局在性をもつと考えられる。モノゴトについて述べる時，普通はどんなもので，何をしているかという順序をとるので，先行・後続句節は入れ換えられない。

《前提》には，存在を表す「ない」「少ない」などの形容詞の中止形が重要なモノゴトの（非）存在を先に述べ，後から微細なモノゴトの存在を述べる，下のような例が多くみられる。

(17) 表通りの新築のビルの四階では，窓ぎわの椅子には人影がなくて，事務室の緑色の絨毯の奥のほうを横切る娘の，赤いソックスの足もとだけがちらと見える。(宴)

(18) ほとんど人影はなく，廃屋ばかりが並んでいる。(紀行)

クテ中止形の《前提》は用例が少ないが，内省ではクテ中止形とク中止形は互いに交替できる。

#### 4.3. 〈先行事態〉を表す形容詞の中止形

《先行事態》は，先行・後続句節において述べられる二つのデキゴトが継起関係となる。運動を表す動詞の中止形に典型的に現れる関係的意味である。

運動を表す動詞の中止形の場合，「ご飯を食べてお風呂に入った」と「お風呂に入ってご飯を食べた」とは異なる事態を表している。中止形の動詞と文末動詞は，中止形の動詞の表す運動が終了し，引き続いて文末動詞の表す運動が始まることを表す。デキゴトの順が句節の順と一致するので，動詞の順序を入れ換えると，全体としては異なる事態を表すことになるのである。これに対し，形容詞は運動を表さず，状態を表すので，並べられたデキゴトは継起関係にはならない。しかし，形容詞の中止形が〈先行事態〉を表すと考えられる，次のような例も存在する。

(19)岩伍も喜和も、全く思いがけなかっただけに一瞬言葉が<sup>なく</sup>、黙ったままその文字を睨めっていると…。(權)

(20)戦争中からそういう傾向が<sup>著しく</sup>、敗戦後は加速度でこの年頃の人たちが変わって行っていた。(父)

これらの例には、時間の経過を表す表現が用いられている。(19)は、「一瞬」という語が「言葉がなく」という状態の持続時間を限定しているため、「言葉がなく」という状態が「瞪める」という動作に先行すると解釈できる。(20)には、戦争中―敗戦後という時の経過を表す表現がある。

しかし、次のように、時を表す表現がなくても成り立つ《先行事態》の例が見出された。

(21)疎くされたことは悲しく、悲しみは恨みに生長し、年とともにいよいよ頑なであった。(父)

(21)は、先行句節において主体の状態を述べ、後続句節においてはその状態を名詞化して主語とし、動詞述語によってその変化を述べている。次のような同じ構造の例を作ることもできる。

(22)花子は合格がとても<sup>うれしく</sup>、そのうれしさは喜びに変わった。

(23)夕焼けの空は<sup>赤く</sup>、その赤さは暗闇に溶けていった。

このような例か、時の経過が状況語等で示された場合にのみ、まれではあるが、形容詞の中止形は〈先行事態〉を表す。後続述語はいずれも運動を表している。内省では(19)～(23)はクテ中止形に置き換えられるが、実例にはクテ中止形が〈先行事態〉を表す用例は見出せなかった。

#### 4.4. 〈原因〉を表す形容詞の中止形

##### 4.4.1. 《原因》の特徴

《原因》は、先行・後続句節が因果関係をもつ。本稿では、《原因》を《先行原因》《条件》《根拠》に下位分類する。《先行原因》は二つのデキゴトに因果関係と時間的先後関係がある場合であり、《条件》は先に述べられるコトガラから後に述べられるコトガラが想定できるという因果関係を表すもので、同時関係と非時間的関係の場合がある。《根拠》は、後続句節がコトガラではなく判断を述べ、先行句節がその根拠を表す。論理的な因果関係のみで、時間的関係はない。

(24)花子は<sup>痛くて</sup>声を上げた。 《先行原因》

(25)花子は<sup>優しくて</sup>皆に人気がある。 《条件》

(26)このりんごは<sup>甘くて</sup>おいしい。 《根拠》

(24)は、「痛い」という生理的な感覚が起こった後で「声を上げた」という時間的先後関係があり、二つのデキゴトには因果関係が認められる。動詞の中止形の《原因》の例は、ほとんどが《先行原因》である。(25)(26)は、主体の特性を述べる述語が並んでいるが、《並列》《前提》の先行・後続句節のように意味的に独立していない。(25)は、「優し」ければ「皆に人気がある」ということが想定でき、因果関係をもつ。(26)の形容詞の中止形は「味」の側面を具体化し、後続述語は抽象的な評価を表すのみなので、形容詞の中止形が評価の根拠となる。

後続句節に対して〈原因〉を表す形容詞の中止形は、後続句節から独立して成り立つ〈並列〉〈前提〉を表す中止形に比べて述語としての機能が弱く、後続句節に従属している。しかし、ノデ

節と比べると、形容詞の中止形は主体の状態や特性を表すという機能を保っていることがわかる。

(24)'～(26)'のノデ節の形容詞は、後続句節の述語の原因を表す機能が主になっている。

(24)'花子は痛いので声を上げた。

(25)'花子は優しいので人気がある。

(26)'このりんごは甘いのでおいしい。

原因や根拠を先に述べるのが普通なので、句節の順序を入れ換えると、不自然な文となる。

(24)"??花子は声を上げて、痛い。

(25)"?花子は皆に人気があつて優しい。

(26)"?このりんごはおいしくて甘い。

#### 4.4.2. 〈先行原因〉を表す形容詞の中止形

##### 4.4.2.1. クテ中止形の表す〈先行原因〉

同一主体の《先行原因》には、ヒトの感情や感覚が生起した結果、無意志的な変化が起こることを表す例が多くみられる。中でも、感情や感覚が生起し、反射的に生理的な反応が起こる(27)～(29)のような例が多い。(30)は意志的動作を行う願望が生起する例、(31)～(33)は結果が意志的動作の例である。(33)の「痛ましい」は感覚そのものではないが、後続句節の主体は、「はれたまぶた」を「痛ましい」と認識した結果、意志的動作を行っていると考えられ、認識時と動作時は時間的先後関係にある。

(27)…, それでも母が派手におどろくと、嬉しくて一緒に大笑いをしてしまった。(岸辺)

(28)はじめて悲しくて涙がこぼれた。(父)

(29)つんのめるところを信彦が脇腹を蹴った。これは本当に痛くて、息が止まった。(岸辺)

(30)「いやね。君と僕とがあんまり似ているのがうれしくて接吻したくなったんだよ」(青)

(31)美美のその言い方が本当に怖くて万亀は隣りに座っている麻美にしがみついた。(本を)

(32)僕はやはり多少は恥ずかしくて、いたずらに自分の頬をピタピタと叩いた。(ティーン)

(33)階段を上ってきたお婆の、はれたまぶたがあまりにも痛ましくて、私はただ、ううん、と言って、その厚いカルピスのカップを受け取った。(予感)

次は異主体の例である。(34)(35)は、先行句節において、「口調」や「評判」という時間軸上のコトを主体としてその状態を述べ、(36)は、「なくて」が一時的(非)存在を表している。後続句節においては、いずれも生理変化や心理変化というヒトの無意志的動作が述べられている。

(34)母の口調は気味が悪いほど優しくて、万亀は恐怖のあまりからだがかわばる。(本を)

(35)「心配してたけど、支店長やなんかの評判もよくて、ホッとしてるんです」(岸辺)

(36)…, 何度もお婆の部屋へ足を運び、汚ない机の上を搜してみたが、その度にやはり何の書き置きも、行く先を示す何ものもなくて、がっかりして台所に戻ってきた。(予感)

##### 4.4.2.2. ク中止形の表す〈先行原因〉

(37)…, あやそうにも自身目を開けていられないほど睡く、遂には子を泣かしながら寝入り

込んでしまって… (權)

(38)Hはちょっと気後れしながら、初めて見る店の裏側が珍しく、あちこち覗き回った (H)

(39)…、明石の着物を着るのもまち遠しく、せかせかと家を出た。(女運)

(40)…、他方から云えばこうもやすやすと行われることかとも深く感じ、思うこと多く、以来死に私一人が直面しようとした。(父)

感情形容詞の中止形が〈先行原因〉を表す例は、ク中止形の同一主体の例にも多い。後続句節において、(37)は無意志的動作、(38)(39)は意志的動作、(40)は意志の生起が述べられている。ク中止形の用例には、(38)(39)のように、後続句節の主体の感情の対象であるガ格名詞が現れる例が多い。次は、先行・後続句節が異主体の場合である。

(41)びっくりした顔で言った哲生には目立った外傷はなく、私はほっとした。(予感)

(42)小学校四年になる上の男の子のいたずらがほげしく、ウメノが思わず叱ると、…。(容色)

(43)布団の中はほっこりと温かく、思わずぶるっと身震いしてしまう。(ポプラ)

(44)追いかけるように届いた鰻重がばかに生臭く、時子はいつにないことだが半分ほど残した。(りんご)

先行句節において、(41)(42)はコト名詞を主語とするデキゴト、(43)は温度という状況が述べられ、どちらも無意志的な生理変化の原因となっている。(44)は、眼前の「鰻重」の状態を認識して、主体が意志的動作を行っている。温度やにおいなどは、場所やモノの状態なのか後続句節の主体の感覚なのかが分ちがたい。主体の感覚とすれば、(33)のように同一主体の例となる。

《先行事態》と異なり、《先行原因》の先行句節には、別のデキゴトを引き起こすだけの程度の高さや意外性をもつデキゴトが述べられる必要がある。同一主体の場合、〈先行原因〉を表す中止形の形容詞の多くは、感情や感覚を表す感情形容詞である。感情や感覚は時間軸上に局在し、平常とは異なる状態であるためだと考えられる。後続述語はいずれも運動を表している。

《先行原因》のク中止形とクテ中止形は互いに交替できるが、一部交替できない場合がある。クテ中止形の《先行原因》には、感情や感覚とそれに続く反射的な生理的反応が結びつく「痛くて涙が出た」「おかしくて笑った」などの例が多いが、ク中止形には例がなく、交替もできない。

(28)' (悲しくて / ?悲しく) 涙がこぼれた。

しかし、感情の原因を表すガ格名詞を挿入し、読点を打てば適切になる。

(28)" 別れが悲しく、涙がこぼれた。

このことから、クテ中止形は後続句節との結びつきが強く、積極的に〈原因〉を表すのに対し、ク中止形は先行句節の述語として文を中止する働きが勝っており、自身の機能を保留した後に、後続述語との意味的な関係から《先行原因》と解釈されるのではないかと推測できる。

#### 4.4.3. 〈条件〉を表す形容詞の中止形

##### 4.4.3.1. クテ中止形の表す〈条件〉

先行句節において特性が述べられ、そこから後続句節において述べられた特性が想定できるという意味関係がある例は、動詞の中止形では言及されていないが、述語名詞の中止形には多い。

「花子は末っ子で甘えん坊だ」のような例で、先行・後続句節に時間的關係がなく、論理的な關係のみである点で、《先行原因》とは明らかに異なる。形容詞の中止形にも次のような例があった。

(45) 甲斐絹はたて糸が弱くてすぐ横に裂けるので…。(おしん)

《条件》には、同時關係にある二つの状態に因果關係が認められる例もある。

(46) 繁ちゃん、受験が近くてイライラしているんじゃないの。(岸辺)

(47) …、僕も眠くって朦朧としていた。(木精)

(48) この頃はまだお客が多くて玄関は毎日よごれる。(こな)

(46)(47)の先行・後続句節において述べられているコトガラは同一主体の中に並存し、時間的先後關係はない。「受験が近い」と「イライラしている」、「眠い」と「朦朧としている」は同時である。(48)は、「今日はお客が多くて、玄関がよごれた」ならば、後続句節が一回限りの運動で、時間的な先後關係も認められるため、《先行原因》となるが、「毎日」という語により、後続句節は繰り返しであることがわかる。「お客が多い」と「玄関は毎日汚れる」は、ある期間に並存する状態、《条件》の例と考えられる<sup>5</sup>。

クテ中止形が〈条件〉を表す用例には、後続句節が否定的意味をもつ例が非常に多いという顕著な特徴がある。それと関連して、「あまり(に)～くて…なかった」という構文をとる例も多い。

(49) あまり草深くて、上水の表は覗けなかった。(宴)

(50) …、目に煤が入ったらしい。涙が出るのに痛くて目が開けられない。(H)

先行句節において、(49)は状況、(50)はヒトの感覚が述べられている。2.3で、形容詞によってモノゴトの特徴や状態が述べられるのは、そのモノゴトの側面に、述べられるべき何らかの程度の高い特徴や程度の高い状態が存在するときであると述べた。何らかの程度が高いことが原因で、通常できるはずのことができなかったという事態は生じやすく、そのために文末に否定表現が多くなると考えられる。述語名詞の中止形の用例にはない、形容詞のみの特徴である。「あまり(に)～くて…なかった」は、程度の高さを明確に表す構文となっている。(49)(50)の後続述語は意志動詞で、実際にしようとしたができなかったというデキゴトを表している。しかし、否定表現はポテンシャルになりやすい。「～くてやりきれない／しかたがない／たまらない／ならない」などは、クテ中止形と一体化して、程度の高さを表現する形式となる。否定表現についてはさらに考える必要があるが、形容詞が相対的な程度の高さを表すことと、クテ中止形の《条件》の例に否定的意味をもつ後続句節が多いことの関わりを指摘しておきたい。

#### 4.4.3.2. ク中止形の表す〈条件〉

次は、いずれも先行句節のコトガラから後続句節のコトガラが想定できる《条件》の例である。

(51) この辺は田圃やどぶが近く、蚊は猛烈だった。(父)

(52) 北の国は秋が早く、その分樹々は鮮やかに染めあがる。(本を)

(53) 雨足は繁、どぶ板のすきまから下水が溢れていた。(地下鉄)

(54) その夜、松じじいは妙に寝ぐるしく、なんども眼がさめた。(法駕籠)

(55) 痛みが激しく小走りのつもりでも這うようにしか歩けない。(岸辺)

先行・後続句節双方において、(51)(52)は特性、(53)～(55)は状態が述べられている。ク中止形にも(55)のような後続句節が否定形の例があるが、クテ中止形ほど多くはない。逆に、特性同士が因果関係をもつ例は、ク中止形に多かった。傾向の違いはあるが、クテ中止形とク中止形の交替は可能である。

#### 4.4.4. 〈根拠〉を表す形容詞の中止形

##### 4.4.4.1. クテ中止形の表す〈根拠〉

《根拠》には、後続句節において評価判断を述べる場合と、関係判断を述べる場合がある<sup>6</sup>。

次は、評価判断の根拠の例である。主体の特性や状態を表し、文末の形容詞は、コトガラの具体的な面を切り捨て、いいか悪いかという抽象的な価値づけのみを行っている。

(56)「…。だけど万亀さんの方がずっといい。体格がよくて健康的だ」(本を)

(57)海苔巻の端っこは、ご飯の割に干びょうと海苔の量が多くておいしい。(詫び状)

(58)だが、午後になってやって来た若手の刑事の一团は仕事が早くて峻烈だった。(鬼たち)

(59)私はそのピリピリ風呂が気味悪くて大嫌いだった。(単位)

(56)(57)は特性、(58)(59)は状態を表す二つの形容詞が並んでいるが、中止形の形容詞は具体的に主体の特性や状態を表し、文末の形容詞はコトガラ具体的な面を切り捨て、いいか悪いかという抽象的な価値づけのみを行っている。

樋口(1989)は、語り手の主観が表現される評価的な文として、〈快・不快〉〈好・悪〉〈美・醜〉〈善・悪〉〈適・不適〉など、正か負かの価値判断や感情を表す例をあげているが、その大部分は形容詞文である。「評価者」の主観性が関わる形容詞文には評価性が現れやすいことによるものだろう。このため、評価判断の《根拠》の例の多くは文末が形容詞であり、この点では先行・後続句節が同種の述語である《並列》と似ている。しかし、《並列》の中止形形容詞と文末形容詞は評価性においても対等であるのに対し、評価判断の《根拠》では評価性が異なっている。正負の方向が同じで評価性が高い語が文末にくると、形容詞の中止形が評価判断の〈根拠〉を表す文となる。

「いい」「いかん」「だめだ」など、評価性が高く、語形も短い語は、クテ中止形との結びつきが緊密で、一語相当の述語に近くなっている。(62)の「悪い」は、評価から聞き手への謝罪という態度表明に変化し、形容詞の中止形がその根拠を表している。

(60)…。やはり日本の海の方が凄みはないが、やさしくていい。(詫び状)

(61)「…。おけいちゃんの身ぶりや言葉は、かたくるしゅうていかん。…」(盗賊)

(62)「少なくて悪いけれど、今これしかないんです。…」(あしか)

次は、モノゴトとモノゴトの異同や類似、適合性という関係判断を表す述語が後続句節にあり、先行句節のクテ中止形がその根拠をさしだす例である。

(63)「嬢ちゃんのフルボーイにつける鞍は小さくて、あの馬にはあわねえ。…」(酔い)

(64)「兄さんのそういう考え方は遅しくて、ぴったり似合ってる」と弟がいった。(戦い)

(63)(64)のクテ中止形は、文末述語が適合性を判断するための〈根拠〉を表している。モノゴト同士の類似関係や適合関係だけが問題となるので、関係判断の〈根拠〉を表す中止形の形容詞

には評価的な意味の有無は関係しない。

#### 4.4.4.2. ク中止形の表す〈根拠〉

ク中止形が、(65)(66)は評価判断の〈根拠〉、(67)(68)は関係判断の〈根拠〉を表している。

(65)父は榎という木を賞美しない。材にもならず、木の品も悪く、馬鹿っ木だと云って、…。

(父)

(66)…、プールの水は適度に冷たく気持ちよかった。(ティーン)

(67)…、彼等の人格偏向ぶりはすさまじく、まさに学者と甲乙つけ難いのである。(数学者)

(68)長屋風の小さな家で、看板もなく、この旗がなかったら普通の仕舞た屋だ。(本を)

(68)は類似関係に基づいて主体を分類し、分類された集合の名を名詞述語によって述べている。

《根拠》の例の内、「いい」「だめだ」などの評価性が高く短い語がクテ中止形と結びついた例は、ク中止形に交替できない。ただし、ク中止形の後に読点を打てば、許容できるようになる。

(60)' \*やはり日本の海の方が凄みはないが、やさしくいい。

(60)"やはり日本の海の方が凄みはないが、やさしく、いい。

しかし、「やさしくていい」は、評価と根拠が一体化しているのに対し、(60)"は、「やさしい」と「いい」という二つの述語が並ぶ《並列》に近く、因果関係は弱まっているのではないだろうか。〈先行原因〉において述べたことと同様に、クテ中止形は後続句節との結びつきが強く、積極的に〈根拠〉という関係的意味を表すのに対し、ク中止形は述語として文を中止する機能が強い。ため、まず後続述語と対等に並べられ、先行・後続句節の意味関係から〈根拠〉を表していると解釈されるのではないかと考えられる。他の例では、ク中止形とクテ中止形は互いに交替できる。

#### 4.5. 〈注釈〉〈解説〉〈評価〉を表す形容詞の中止形—陳述成分に近づく形容詞の中止形—

##### 4.5.1. 《注釈》《解説》《評価》の特徴

〈注釈〉〈解説〉〈評価〉を表す形容詞の中止形は、「評価者」である語り手の判断を述べる点で共通し、〈並列〉〈前提〉〈原因〉を表す中止形とは異なっている。後続句節において述べられるコトガラの違いや後続句節に対する従属度の違いによって、三種はさらに区別される。

《注釈》は、後続句節の具体的なコトガラから、語り手が抽出し判断した特性や状態を、聞き手への注釈として先行句節において述べるものである。

(69)田中先生は厳しくて、忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる。

(69)は、「厳しくて」から後続句節の「忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる」が想定できる点で《原因》と似ているが、逆に「忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる」から「厳しい」も想定できる。このため、《原因》では句節の順序を入れ換えられなかったが、《注釈》では可能である。

(69)' 田中先生は忘れ物をするとすぐ廊下に立たせて、厳しい。

しかし、形容詞「厳しい」は「評価者」の判断、「忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる」は繰り返される行為で、客観的事実である。したがって、先行・後続句節を入れ換えると、先行句節において述べられた事実を根拠として後続句節の判断が生まれたと解釈され、《根拠》の例となる。

「厳しい」が判断で「忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる」が客観的事実である点は、句節の前後を入れ換える前も同じであるが、客観的事実を述べる前に、そこから抽出された語り手の判断を挿入すると、後続句節に対する〈注釈〉を表すことになるのである。〈注釈〉を表す中止形「厳しくて」は、特性を述べるという述語性も残るが、後続句節において述べられたコトガラに対する語り手の判断である点で、陳述<sup>7</sup>の機能をもっている。

《注釈》は、先行・後続句節において述べられるコトガラが概要－詳細の順に並ぶ《前提》とも似ているが、《前提》では、先行・後続句節のコトガラは、独立して成り立つ事実である。したがって、先行・後続句節を入れ換えても、《注釈》と違い《根拠》の例にはならない。

(9) 花子は顔が丸くて目が大きい。⇒? 花子は目が大きくて顔が丸い。

《解説》は、客観的な後続句節のコトガラに対し、主体についてよく知る語り手が、聞き手に向けた解説を先行句節において述べるものである。《関係解説》は具体的な解答を述べる名詞述語の前に主体と他との関係を述べ、《原理解説》は、運動を述べる動詞述語の前にデキゴトの原因や原理を先に述べる<sup>8</sup>。後続句節において述べられるコトガラの客観性が《注釈》の後続句節よりも増しているため、相対的に〈注釈〉を表す形容詞の中止形よりも客観的な表現が多くなる。

《原理解説》は述語名詞の中止形に多く、「人々は連鎖反応で次々と倒れた」のような後続句節の現象が起こった原理を述べる例が、一つの類型をなしている。形容詞の中止形には、述語名詞のような典型的な《原理解説》が少ないため、ここでは、《関係解説》について述べる。

(70) 花子の母親は身長が170センチもある。花子は母親より大きくて、172センチある。

後続述語において、花子の身長についての直接的な解答が示されているが、まず、前に述べた母親との関係を述べて、聞き手に解説している。「花子は母親より大きい」という文が成り立つので、「母親より大きくて」は先行句節の述語でもあるが、「花子は172センチある」というコトガラに対する語り手の解説でもある。そのため、同じ事実に対して別の解説が加わることもある。

(70) 花子の母親は身長が170センチもある。花子は母親に似て、172センチある。

《評価》の先行句節は主観性が《注釈》よりさらに強く、後続句節のコトガラに対する語りの気持ちの表出となる<sup>9</sup>。

(71) 花子はさすがに足が速くて、前の選手を次々と追い抜いた。

先行句節の「さすがに」によって、花子を知る語り手が、目前の「前の選手を次々と追い抜いた」というデキゴトから「花子は足が速い!」と再認識したことがわかる。「さすがに」がなければ後続句節の具体的なデキゴトが先行句節の特性の現れであるため、後続句節において述べられているコトガラから花子の特性を抽出する、《注釈》の例となる。

(71) 花子は足が速くて、前の選手を次々と追い抜いた。

「さすがに」によって、先行句節は主体の特性を叙述するのではなく、語り手の気持ちの表出となる。先行句節全体が、後続句節に対する語り手の心的態度を表す前置きの陳述成分である。

このように、〈注釈〉と同様、〈解説〉や〈評価〉を表す中止形も、後続句節に対する語り手の判断や気持ちを先に述べているため、先行・後続句節を入れ換えると《根拠》の例となる。

(70) 花子は172センチあって、母親より大きい。



(71)「花子は前の選手を次々と追い抜き、さすがに足が速い。

動詞の中止形が陳述成分となる例は少ないが、これは動詞文が基本的に「評価者」なしに具体的なデキゴトを述べるものだからである。形容詞文には「評価者」が存在するため、形容詞の中止形が〈注釈〉〈解説〉〈評価〉を表し、先行句節が陳述成分に近づく例は、多く見出される。

#### 4.5.2. 〈注釈〉を表す形容詞の中止形

##### 4.5.2.1. クテ中止形の表す〈注釈〉

《注釈》は、同一主体について、先行・後続句節において抽象的・具体的の両面から述べる。

(72)「この地区の収集車は厳しくて、燃えるゴミは紙袋、燃えないゴミはビニール袋に入れて出さないと、持って行ってくれないんです。…」(裏切)

(73)二十一、二ぐらいにおなりだが、まだ少女っぽくて、体つきもほっそりと弱々しく、やさしく愛らしい。(新源氏)

(74)(気味悪い。……)と義昭が思ったほど、信長の機嫌がよくて、いつも笑ったことのないこの岐阜の豪雄が始終唇許を綻ばせ、茶道のはなしなど罪のない話題をもち出しては歓談した。(国盗り)

(75)僕はほとんど酩酊に近く、さっきから椅子の背によりかかって半ば眠っていた。(僕)

クテ中止形は、(72)(73)は主体の特性、(74)(75)は状態を述べている。後続句節においては、クテ中止形一言でまとめられるような、具体的特性や具体的な動作の様子が述べられている。《注釈》では、(74)のように状態が述べられる例でも、先行・後続句節に時間的な関係はない。「機嫌がよくて」というのは、後続句節の具体的な行動に表れた「信長」の心理状態を先に述べたものである。《注釈》には「楽しくて」のような一人称の感情や感覚を直接表す形容詞ではなく、「機嫌がよく」のように、表面に表れた心理状態を描写する形容詞の中止形が多く現れる。

また、(73)の「少女っぽくて」や(75)の「酩酊に近く」のような、具体的な性質や様子が想定しやすい名詞と関係づける形容詞の中止形の例も多い。「少女」「酩酊」からは主体の様子が想像でき、その想像に近い具体的なコトガラが後続句節において述べられている。〈注釈〉の典型例は述語名詞の中止形にある。客観的に本来属する集団を述べるのではなく、「花子はラテン系で、いつも陽気に騒いでいる」のような、後続句節のコトガラから語り手が主観によって分類した結果を述語名詞で述べる例である。「～っぽい」という接辞をもつ形容詞や「近い」という関係を示す形容詞も、特性や状態が想定しやすい名詞との関係づけによって〈注釈〉を表す中止形となる。

《注釈》にも、(72)のように後続句節が否定的な意味をもつ例が多い。《注釈》の場合、否定的な意味を表す後続句節において述べられるコトガラがポテンシャルと解釈されると、後続句節が主体の特徴の程度の高さを強調するための修辭的な成分である、次のような文と同じになる。

(72)「この地区の収集車は、燃えるゴミは紙袋、燃えないゴミはビニール袋に入れて出さないと、持って行ってくれないぐらい厳しい。

(72)の後続句節が程度を表すポテンシャルなものなのか、アクチュアルな事実を述べているのかは、文脈の中でしか判断できない。この延長線上には、後続句節が固定的表現になる(76)や、

文末に「～ほどだ」「～くらいだ」という程度表現が顕在する(77)のような例があると思われる。

(76)そのころは私は忙しくて、言葉どおり寸暇もありませんでした。(ビルマ)

(77)「…。独逸の子供は栄養がわるくて、転べばすぐ骨が折れるっていうくらいだ。…」(楡)

#### 4.5.2.2. ク中止形の表す〈注釈〉

(78)ドイツでは高等学校(ギムナジウム)を卒業すれば、どこの国立大学にもは入れるのだが、二年後の前期試験から実にきびしく、学生たちはむごいほど淘汰されていく。(木精)

(79)私は子供のくせにお爛の加減を見るのがうまく、「この子はすぐにでも料理屋へお嫁にゆけるねえ」と親戚の人からかわれたことがある。(詫び状)

(78)(79)の先行句節には特性、後続句節には(78)は繰り返しの運動、(79)は特性を物語るエピソードという運動が述べられている。ク中止形にも、後続句節が程度の高さを表す例がある。

(80)やはり風は強く、檜葉の生け垣が撓うほどの吹き降りだった。(感傷)

〈注釈〉のクテ中止形とク中止形は、内省では互いに交替できる。

#### 4.5.3. 〈解説〉を表す形容詞の中止形

##### 4.5.3.1. 〈関係解説〉を表す形容詞の中止形

〈関係解説〉は、関係を表す語の中止形によって表される。形容詞は相対性をもつため、形容詞の中止形には程度副詞による程度限定や比較表現による、特徴的な《関係解説》の例がある。

(81)地球上のすべてのものは、大気圧という圧力を受けている。この圧力はかなり天きくて、一平方センチあたり約一キログラムもの力である。(単位)

(82)父親は、消防署に送られてきた焼夷弾の実物を見たそうだ。サイダー瓶よりも長く五十センチはあったという。(H)

(81)(82)の後続句節にある数字は、絶対的な表現で客観的なものであるが、それがどの程度のものか、日常経験的なレベルで把握できない場合がある。そこで、数字で答えを出す前に、語り手が先行句節において程度副詞や身近なモノとの比較によって相対的な程度を述べ、解説としている。(81)(82)のク中止形とクテ中止形は、互いに交替できる。

次の例は、関係を表す形容詞の中止形が、〈関係解説〉を表している。(83)は、強制力についての直接解答を示す後続句節に対し、他のモノゴトとの類似関係を示している。(84)は、形容詞の中止形が「軽井沢」のような特定の地名との関係を述べていて、具体的なコトガラが想定されやすい名詞との関係を示す〈注釈〉とは異なっている。ただし、(84)も、「軽井沢にふさわしい」から一般的に晴天がイメージされるのならば、〈注釈〉となるだろう。関係の意味の判別には、日常的な知識や社会通念なども関係している。「～にふさわしく」は、クテ中止形に交替ができない。

(83)[戦時標語は]標語といっても、いまのように強制力の弱いものではありません。いわば政府のお達しに近く、それこそ法律に並ぶぐらいの力があつた。(飛龍)

(84)翌日は軽井沢にふさわしくよく晴れた。(予感)

#### 4.5.3.2. 〈原理解説〉を表す形容詞の中止形

4.5.1.において述べたように、運動を表す後続句節の前に、デキゴトが起こった原因や原理を解説として挿入する《原理解説》は、述語名詞の中止形が典型的である。述語名詞ほど明確ではないが、以下の例は、形容詞の中止形が〈原理解説〉を表していると考えられる。

(85)それから、「えいっ」といって、はさみをもちあげました。(略)でもそのあと、オサムくんははさみがおもくて、ひっくりかえってしまいました。(ポプラ)

(86)繁は謙作の目を見た。やや背が高く、見下ろすような目になった。(岸辺)

(85)の「はさみがおもくて」は、はさみの特性を述べるというよりは、はさみがおさむくんにとってどのようなものだったかを、ひっくりかえった原因として語り手の立場から提示している。(86)の先行句節は、明示されていないが、比較表現である。語り手は、後続句節で述べられた現象を分析し、「繁と謙作」というヒト同士の大きさの関係が原因だ、と述べているものと思われる。両例とも、後続句節において、運動を表す無意志的な現象が述べられている。《先行原因》には、「鰻重が生臭くて、残した」のように、主体がモノゴトの特性や状態を認識した後で意志的動作を行うという例があったが、これに比べ、(85)(86)の先行句節には、語り手の分析の過程が加わるという違いが感じられる。内省では、《原理解説》のク中止形とクテ中止形は互いに交替できる。

#### 4.5.4. 〈評価〉を表す形容詞の中止形

(87)～(89)は、先行句節に陳述副詞があり、陳述副詞を含む先行句節が後続句節に対する評価を表している。(87)の「まったく」は、「いやということを認めてくれないとは、まったくこういうときに父は押し強い！」と、後続句節のコトガラに対する積極的な評価の気持ちを表している。

(87)父は大変いいんだと云って、無理にやらせた。まったくこういうときに父は押し強くて、いやということを認めてくれなかった。(こんな)

(88)おまけに山の天気はさすがに変り易く、晴れていた空がいつの間にか曇り、ぽつぽつと雨が落ちてきたと思うと、すぐに沛然たる豪雨になった。(木精)

(89)彼女は案外足が速く、伸治がようやく追いついたときには、もう「ドルネシア」の見える場所に来ていた。(ドルネシア)

次のク中止形は、先行句節の述語ではなくなり、語として評価を表す副詞に移行している。

(90)にもかかわらず、私はどうやら若年にして運悪くニヒリズムを知っていた。(超少女)

(91)思いがけなく遅塚さんが、ここまで負って弔問して下さった。(父)

(92)野口はまぶしがって姿勢が崩れ、この瞬間に写真師は抜け目なくシャッターを切った。(宴)

ク中止形は、(90)(91)は後続句節において述べられるコトガラ全体、(92)は主体の動作に対する評価を表している。コトガラに対する評価を表す評価副詞は、「運良く／悪く、折よく／悪く／悪しく」など、運やタイミングのよしあしを表すものと「思いがけなく、珍しく」のように日常と目の前のデキゴトを対比して意外性を表すものがある。動作主体や動作そのものに対する評価を表す評価副詞へ移行するのは、「目ざとく、小賢しく、抜け目なく」など、語り手の主観性が強

く、評価性の高い形容詞が多い。「抜け目なく」は修飾成分に近いが、「この瞬間にシャッターを切った」ことに対する評価で、動作を詳しく述べるものではない。(90)は、「私は運が悪く」とは異なり、「運悪く」は格助詞が省略された形で評価副詞になっている。(91)の「思いがけなく」も語り手の気持ちでありながら主語がとれない。これらの評価副詞には述語性がないと考えられる。

(87)～(89)のク中止形とクテ中止形は交替できるが、評価副詞はクテ中止形に交替できない。

#### 4.6. 〈副状態〉を表す形容詞の中止形—修飾成分に近づく形容詞の中止形—

《副状態》は、主体の主たる状態や動作が後続句節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を、先行句節において述べるものである。

(93) 花子は声も<sup>なく</sup>、立ちつくしている。

(93)の先行句節は、主体が動作を行う際の声の様子という副次的な状態を述べている。動詞の中止形では「付帯状況」とされ、動作の様子を詳しくする修飾成分に近い。しかし、「花子は声もない」という文が成り立ち、「声もない」と「立ちつくしている」という状態は時間軸上に並存しているので、〈副状態〉を表す形容詞の中止形には先行句節の述語の機能も残ると考えられる。情態副詞の例「彼は速く走った」の「速く」は、あくまでも「走る」という動作の「速さ」という側面を詳しくするもので、運動と並存する主体の状態を表してはいない点、〈副状態〉とは異なる。

(94) そういう会話を、私はお茶を持って行きながら<sup>寂しく</sup>聞いていた。(父)

(95) 又、あるとき、当時五ツの孫と庭に出ている祖父の黒い石摺の羽織の背中はひろく、孫の赤い友禅の肩あげは<sup>ふか</sup>、二人ともしゃがみ込んで庭大根の話をしている。(こんな)

(96) 年老いたばあやが<sup>蝙蝠がさもなく</sup>、日盛り道をぼつぼつ歩いて、また別な氷屋へ行った。(父)

(97) 姉妹は声も<sup>なく</sup>病室に戻る。(夏の日)

(98) 伊勢屋ははじかれたように立ち上がり、座敷を飛び出した。しばらくして<sup>足音も荒く</sup>戻ってきた。(鯉)

後続句節の目に見える全体的な運動が行われる際の、主体の目に見えない心理状態や声や音、部分的な服装や携行品などが、形容詞のク中止形によって述べられている。心理状態はク中止形のみのもので、その他は「服装／携行品／声／音ハ(モ)～く」という形で、主たる動作の副次的な状態を表す。ハではなくモでマークされる形や助辞のない形（「足音荒く」等）は組み合わせが固定化している。《副状態》の用例はク中止形のみで、クテ中止形への交替はできない。

#### 5. クテ中止形とク中止形の相違点

<表1>は、関係の意味ごとの二つの中止形の用例数の割合の比較である。10作品<sup>10</sup>の《並列》から《解説》までのク中止形181例、クテ中止形56例の全用例数を100として数値化した。表中の-は10作品以外の全作品にも用例がないもの、+は用例が存在するが、用例数は出していないもの、#は10作品には用例がないが、全作品中には出現したものを表している。

＜表1＞ クテ中止形とク中止形の表す関係の意味

	並列	前提	先行事態	原因	注釈			解説			評価		副状	
					先行	条件	根拠	関係	原理	判断	副詞			
クテ	21	9	☒	69	16	23	30	#	#	#	-	+	☒	☒
ク	25	34	3	24	5	11	8	12	1	+	-	+	+	+
イ形	24	31	3	35	7	14	14	9	1	#	-	+	+	+

表からわかるように、クテ中止形には《副状態》の例、評価副詞となる例がない。ク中止形の用例との交替もできなかつた。《先行事態》の例はク中止形のみで、交替が可能であるにもかかわらず、全用例に範囲を広げてもクテ中止形の例はない。あとは両方の形に用例が現れた。数の面からみると、ク中止形はクテ中止形に比べ、《前提》の例が非常に多く、《注釈》の例も多い。反対に、クテ中止形は《原因》の例が多い。評価副詞や情態副詞となるのは〜クという形のみであることから、ク中止形は〈並列〉〈前提〉を表す述語性の高いものと、述語性が弱まったものに用例が多く、クテ中止形は中間的な〈原因〉を表す例が多いといえる。

また、会話文中の用例数の差という、文体的な違いも大きい。クテ中止形の会話文中の例は10作品56例中23例あったのに対し、ク中止形は181例中1例であった。クテ中止形の会話文の例をク中止形に変えると不自然であることから、会話文ではクテ中止形は問題ないが、ク中止形は用いられにくいという文体的な差があると考えられる。

4.の用例の考察の結果では、反射的に生理的変化が起こる〈先行原因〉と、評価性が高く、語形が短い「いい、だめだ」などと強く結びつく〈根拠〉を表すクテ中止形は、ク中止形との交替はできなかつた。読点を入れると不自然ではなくなることから、ク中止形のほうが文を中止する機能が勝り、クテ中止形は、原因として後続述語と結びつきやすいという仮説を述べた。

このクテ中止形とク中止形のこの違いは、倒置文にも現れる。

(99) 「宮仕えはもうこりごりだよ、注文ばかり多くて。…」(ツイス)

(99)' ? 「宮仕えはもうこりごりだよ、注文ばかり多く。…」

クテ中止形は倒置されても原因の解釈ができるのに対し、ク中止形は意味が通じない。会話文に現れにくいため、倒置文が少ない点は考慮すべきであるが、クテ中止形は因果関係を表す例が多いため、その形だけで原因という解釈ができるのに対し、ク中止形は、中止形という形と先行するという二つの条件が揃わないと、原因の意味を表すことが難しいのではないだろうか。

動詞の二つの中止形については、言語学研究会(1989a,1989 b), 新川(1990)が、第一なかどめ(シ中止形)は並列的に、第二なかどめ(シテ中止形)は複合的に二つの状態・動作を結びつけると述べている。また、会話文中にシ中止形の並ぶ例がなく、文体的な差があることは全(1996)も述べている。形容詞においても同様の結論が出せるのではないかと考えるが、さらに考察が必要である。

## 6. 形容詞の品詞性と中止形の表す関係の意味との関係

〈表2〉は、形容詞の中止形が表す関係の意味の違いによる、先行・後続句節において述べられるコトガラの違い、先行・後続句節のとり主体の違いをまとめたものである。

〈表2〉形容詞の中止形の表す関係の意味と先行句節・後続句節のコトガラおよび主体の異同

先行句節		特徴を表す場合	デキゴトを表す場合	主 体
		先行句節 - 後続句節	先行句節 - 後続句節	
並	列	特性 - 特性	状態 - 状態	異・同
前	提	特性 - 特性	状態 - 状態	異・同
先	行 事 態	☐	状態 - 運動	異・(同)
原 因	先行原因	☐	状態 - 運動	異・同
	条 件	特性 - 特性	状態 - 状態 / 繰り返し	異・同
	根 拠	特性 - 判断	状態 - 判断	同
注	積	特性 - 状態 / 運動 / 繰り返し	状態 - 状態 / 運動 / 繰り返し	同
解 説	関 係	☐ 関係 - 名詞述語	☐	同
	原 理	特性 - 運動	☐	同
評	価	特性 - 運動	☐	同
副	状 態	☐	状態 - 状態 / 運動	同

動詞の中止形の用例に多い《先行事態》《先行原因》《副状態》の先行・後続句節は、ともに時間軸上のデキゴトが述べられる時間的な関係である。これらは主に時間軸上のデキゴトを表すという動詞の性格によっている。これに対し、主に特性や状態を表し、運動を表さない形容詞の中止形が〈先行事態〉を表す例はごくまれである。ただし、感情形容詞という、時間軸上の日常とは異なる状態を表す形容詞の中止形が〈先行原因〉を表す例は、多く出現した。《先行事態》《先行原因》の後続述語は、運動を表す動詞である。人の具体的で目に見える状態や運動に伴う副次的な状態を表す形容詞の中止形が〈副状態〉を表す例もある。〈副状態〉を表す中止形は文末動詞の表す運動を修飾する成分に近づいているが、主体の状態を表している点で、述語としての機能が残っている。主体は常に同一で、後続句節の述語は運動や状態を表す動詞となる。

形容詞は特性を表すため、先行・後続句節の間に、非時間的な関係をもつ例が多く存在する。《条件》には、先行句節において述べられた特性から後続句節において述べられた特性が想定できるという特徴的な例がある。また、形容詞文に「評価者」が存在することにより、動詞では指摘されていない《注釈》《解説》《評価》の例が多く現れる。《注釈》の中止形には述語性も残るが、これらの先行句節は陳述成分に近づき、文中で述べられるコトガラは、後続述語の表すコトガラみとなる。先行句節がコトガラではなく、語り手の判断を表しているからである。このため、これらの例では、先行・後続句節を入れ換えると、後続句節が判断を表す《根拠》の例となる。

動詞の中止形にこれらの例が少ないのは、動詞文が「評価者」が存在しない客観的な描写を主とするためである。しかし、吉田(1996)があげる「罵って～と言う」「誉めて～と話す」など、語

り手の価値判断を表す動詞の中止形が〈注釈〉を表す例もある。また、関係を表す語は品詞を越えて存在するため、動詞や述語名詞の中止形が〈関係解説〉を表す例もある。渡辺(1971)が「解説の誘導成分」とした「体格は父に肖て頑丈だ」は、動詞の中止形の《関係解説》の例で、「父親似で」と述語名詞に変えても同様である。ただし、形容詞の中止形には、「…より～く／くて」という比較表現によって関係を述べる形容詞の中止形が〈関係解説〉を表す、特徴的な例がある。

最後に、中止形を含む先行句節の従属度について述べておく。動詞の中止形の場合、仁田(1995)によれば、《副状態》の先行句節がもっとも従属度が高く、《先行事態》《原因》《並列》の順に低くなる。形容詞においても《副状態》の先行句節は修飾成分に近づく点で従属度は高く、南(1964)のA段階にある。《並列》《前提》は先行・後続句節が互いに独立して別のコトガラを述べるという意味で先行句節の従属度は低く、C段階であり、《先行事態》《原因》の先行句節は中間的で、B段階である。《注釈》《解説》《評価》の先行句節は、後続句節と別のコトガラを述べず、別の主体もとらないという意味では、主節である後続句節に対して従属度が高い。ただし、語り手の心的態度を表すという点ではC段階となる。さらに、「語り手が聞き手に対して」注釈、解説し、評価を挿入するという意味で、これらの先行句節はD段階のものであるとも考えられる。形容詞は「評価者」である語り手の心的態度とコトガラが未分化である点が動詞とは異なっているため、中止形を含む節の従属度も異なると考えられるが、最終的な結論は、後続句節の述語がモダリティ形式をとる例を考察に加えた上で明らかにしたい。陳述成分になるという従属の方向性をもつ先行句節が、語り手の主観を表す形容詞の中止形を含む複文に多く現れることを指摘する。

本稿では、形容詞の品詞性がその中止形の表す関係の意味と深く関わっていること、中止形の全体像をとらえるためには、中止形となる語の品詞毎に用例を検証することが必要なことを明らかにした。時間軸上の運動を客観的に表す動詞と、時間とは無関係の特性や時間軸上の状態を語り手の主観を交えて表す形容詞の品詞性の違いが、それぞれの中止形の表す関係の意味に反映されている。と同時に、非典型的な例も含めると、表す関係の意味は品詞の違いに関わらず、かなり重なっていることもわかった。中止形となる語の語彙の意味が、品詞の違いを越えて関係の意味の成立に関わっているためだと考えられる。どのような語彙の意味をもつ語の中止形がどのような関係の意味を表すのかという、それぞれの個別的な考察は、本稿では部分的にしか述べることができなかつた。別稿において、改めて述べることにしたい。

## 注

- 1 移行した中止形の例は、陳述副詞の「けっして」「しいて」など、接続詞の「したがって」「ついで」など、後置詞の「(に) によって、ついて、(から)みて、して、いって」など。これらは、動詞の「決する」「強いる」「従う」などのもつ語彙の意味を失っている。また、動詞としての「見る」「する」「言う」は、語彙の意味が全く異なっているが、後置詞「(～から) みて、して、いって」は、ほぼ同じ意味を表している。高橋(1983)は、機能が変化すると意味も変化することを、このように説明している。
- 2 草薙(1978)の「情報提供者」、山岡(2000)の「経験者」もほぼ同じ概念を指している。
- 3 主語が明示されない例もあるが、本稿では何について述べられているかを考慮し、述べられて

いるモノゴト（ヒト，モノ，コトなどを含む）を「主体」とする。

4 述語名詞の中止形に、状況－状況下の運動という順に述べる例が非常に多く存在することを津留崎(2002)において述べた。形容詞の中止形は《前提》の例が少ないが、状況－状況下の運動という順序の例は、数例存在する。

5 仁田(1995)は、「〈起因的継起〉における継起性では、事象出現の始端に対する継起性が存しておれば、事象そのものの同存性が許される。」として、「ラリーが少しおなかを壊していて元気がありません」のような同時関係の例は〈起因的継起〉に含めている。同時関係の例は、(48)のような特性同士が因果関係をもつ《条件》の例と《先行原因》との中間的なものと考えられるが、変化の結果状態を表す動詞と異なり、形容詞の中止形の例では、先行・後続句節のコトガラには先後関係が認められないため、本稿では同時関係の例を《条件》に含める。

6 文末にモダリティ形式をとまなう例も含めると、推定・断定の根拠、とるべき行為に対する判断の根拠の例もある。本稿では文末が言い切りの例のみを扱った。これらについては津留崎(2002)を参照されたい。

7 「陳述」を文の叙述内容に対する語り手の態度とし、文中で陳述を表す成分（語や句、節）を「陳述成分」とする。

8 述語名詞やナ形容詞の中止形には、このほかに後続句節に対する語り手の判断を挿入する《判断解説》の例がある。詳細は、津留崎(2000,2001,2002)を参照されたい。

9 この文も、関係解説の例である。

10 以下の10作品である。赤川次郎『三毛猫ホームズのびっくり箱』光文社文庫／赤瀬川隼『ダイヤモンドの四季』新潮文庫／浅田次郎『地下鉄に乗って』講談社文庫／阿部公房『笑う月』新潮文庫／泡坂妻夫『風を見る武士』文春文庫／つかこうへい『菜の花郵便局』角川文庫／宮尾登美子『揚桃の熟れる頃』新潮文庫／宮部みゆき『初ものがたり』新潮文庫／宮本輝『避暑地の猫』新潮文庫／山本夏彦『日常茶飯事』中公文庫

#### 参考文献

- 荒 正子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』147-162,むぎ書房
- 大鹿薫久(1985)「て」接続考』『叙説』12,219-228,奈良女子大学
- 奥田靖雄(1996)「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2-22,2-14,むぎ書房
- 加藤陽子(1995)「テ形節分類の一試案 従属度を基準として」『世界の日本語教育』5,209-224,国際交流基金
- 川端善明(1958)「接続と修飾—「連用」についての序説—」『国語國文』27-5,38-64,京都大学
- 草薙 裕(1978)「日本語形容表現の意味—情報提供という観点からの考察—」『文藝言語研究 言語篇』2,89-110,筑波大学
- 工藤 浩(1997)「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』,左55-72,ひつじ書房
- 工藤真由美(1998)「非動的述語のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』63-1,66-81,至文堂
- (2001)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法学会第2回大会発表論文集』
- 言語学研究会(1989 a)「なかどめ—動詞の第二なかどめの場合—」『ことばの科学3』11-47,むぎ書房
- (1989 b)「なかどめ—動詞の第一なかどめの場合—」『ことばの科学4』163-179,むぎ



## 書房

- 佐藤里美(1997)「名詞述語の意味的なタイプ—主語が人名詞の場合—」『ことばの科学 8』151-212,むぎ書房
- 白川博之(1990)「独立性の高いテ形・連用形」『広島大学教育学部紀要』2-38,235-244,広島大学
- 鈴木 泰(1978)「指定辞『ニテ』の句格」『山形大学紀要(人文学部)』9-1,145-192,山形大学
- 全 成龍(1996)「現代日本語のなかどめの構文論的な研究…韓国語との対照研究をふまえて…」大東文化大学博士論文(未公開)
- 高橋太郎(1983)「構造と機能と意味—動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって—」『日本語学』1-12,13-21,明治書院
- (1986)「形容詞のテンスについて」『論集 日本語研究(一)現代編』,137-161,明治書院
- 高橋太郎ほか(2001)『日本語の文法』講義テキスト(未公開)
- 津留崎由紀子(2000)「名詞述語の中止形デの機能」『人間文化論叢』2,109-119,お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- (2001)「ナ形容詞のテ中止形の構文的機能」『人間文化論叢』3,181-191,お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- (2002)「述語名詞および形容詞の表す関係の意味についての研究」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文(未公開)
- 成田徹男(1983)「動詞の「て」形の副詞的用法—様態動詞を中心に—」渡辺実編『副用語の研究』137-158,明治書院
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 仁田義雄(1995)「シテ形接続をめぐって」『複文の研究・上』87-126,くろしお出版
- 樋口文彦(1989)「評価的な文」『ことばの科学 3』181-192,むぎ書房
- (1996)「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞」『ことばの科学 7』36-60,むぎ書房
- (2001)「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』43-66,むぎ書房
- 南不二男(1964)「複文」『講座現代語 6』明治書院(『現代日本語の構造』1974大修館書店による)
- 八亀裕美(2001)「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究』別冊 1 大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室
- 山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 吉田妙子(1996)「言い換え前触れのテ形について」『日本語教育』91,49-60,日本語教育学会
- 吉永 尚(1995)「なかどめ形節分類についての考察」『日本語・日本文化研究』5,92-106,大阪外国語大学日本語講座
- 渡辺 実(1971)『国語構文論』塙書房

## 用例出典

(蹉跌)石川達三「青春の蹉跌」(ビルマ)竹山道雄「ビルマの豎琴」(戦い)大江健三郎「戦いの今日」(国盗り)司馬遼太郎「国盗り物語」(新源氏)田辺聖子「新源氏物語」(楡)北杜夫「楡家の人々」以上CD-ROM版『新潮文庫の100冊』/(H)妹尾河童『少年H』講談社文庫/(だら)「だらだら坂」(りんご)「りんごの皮」向田邦子『思い出トラUMP』新潮文庫/(おきみ)「おきみさんと珊瑚」(おしん)「おしんさんと梅檀の木」宮尾登美子『揚桃の熟れる頃』新潮文庫/(詫び状)向田邦子『父の詫び状』文春文庫/(数学者)藤原正彦『数学者の言葉では』新潮文庫/(宴)三島由紀夫『宴のあと』新

潮文庫／(青)三島由紀夫『青の時代』新潮文庫／(予感)吉本ばなな『哀しい予感』角川文庫／(紀行)「アフガニスタン紀行」井上靖『西域物語』新潮文庫／(權)宮尾登美子『權』新潮文庫／(木精)北杜夫『木精』新潮文庫／(父)「父」(こな)「こなこと」幸田文『父・こなこと』新潮文庫／(岸边)山田太一『岸边のアلبム』角川文庫／(酔い)北杜夫『酔いどれ船』新潮文庫／(ティーン)「ティーンエイジ・サマー」鷺沢萌『少年たちの終わらない夜』河出文庫／(ポプラ)湯本果樹実『ポプラの秋』新潮文庫／(鬼)「鬼たちの声」(女運)「女運長久」(感傷)「感傷旅行」田辺聖子『感傷旅行』角川文庫／(ツイス)広瀬正『ツイス』集英社文庫／(鯉)「鯉千両」宮部みゆき『初ものがたり』新潮文庫／(法駕籠)「法駕籠の御寮さん」(盗賊)「盗賊と問者」司馬遼太郎『大坂侍』講談社文庫／(本を)林真理子『本を読む女』新潮文庫／(単位)清水義範『単位物語』講談社文庫／(僕)三田誠広『僕って何』角川文庫／(裏切)「裏切らないで」(ドルネシア)「ドルネシアへようこそ」宮部みゆき『返事はいらぬ』新潮文庫／(夏の日)「夏の日」(巡礼)赤瀬川隼『ダイヤモンドの四季』新潮文庫／(あしか)「あしか祭り」村上春樹『カンガルー日和』講談社文庫／(超少女)宮迫千鶴『超少女へ』集英社文庫／(飛龍)「飛龍伝」つかこうへい『菜の花郵便局』角川文庫／(地下鉄)浅田次郎『地下鉄に乗って』講談社文庫

付記：本稿は、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科に提出し、学位を受けた博士學位論文の一部をもとに改稿したものである。本稿をまとめるにあたり、指導教官の鈴木泰先生、および本誌査読者から多くの有益なご指摘をいただいた。記して感謝申し上げたい。

(投稿受理日 2002年3月18日)

(改稿受理日 2003年3月17日)

---

津留崎 由紀子 (つるさき ゆきこ)

フェリス女学院大学文学部非常勤講師，千葉大学留学生センター非常勤講師

216-0033 川崎市宮前区宮崎 2 - 6 - 11 D-332

y-tsuru@guitar.ocn.ne.jp

# On the relational meanings of a preceding - clause toward a following - clause in a complex sentence which uses *Chuushi-Kei* of adjectives

TSURUSAKI Yukiko

Ferris University

## Keywords

adjective, subjectivity, relativity, temporal localization, ku-chuushi-kei/ kute-chuushi-kei

## Abstract

This study presents the relational meanings of preceding-clause, which include *chuushi-kei* of adjectives, toward a following-clause by classifying the relational meanings into <parallel>, <promise>, <predicating-event>, <cause> (<preceding-cause>, <condition> and <ground>), <outline>, <comment> (<comment on relation> and <comment on principle of phenomena>), <evaluation> and <incidental-condition>.

These relational meanings arise from the following features of adjectives;

- (1) An adjective sentence expresses not only a property, a relation and a constant existence, which are classified as a constant feature, but also a state and a temporary existence, which are classified as an event actually occurring in a time-scale. However, it does not express an action that is expressed by a verb sentence.
- (2) In an adjective sentence the subjectivity of a speaker is usually expressed.
- (3) An adjective has relativity in its own meaning.

From these features of adjectives arise several differences from *chuushi-kei of verbs*.

First of all, from the above feature (1), there arise few examples of <preceding-event> in sentences using *chuushi-kei* of adjectives, many of which are in sentences using *chuushi-kei* of verbs.

Secondly, from the above feature (2), there arise adjectives' characteristic relational meanings, namely <outline>, <comment> and <evaluation >. Those are rarely found in sentences using *chuushi-kei* of verbs. Preceding-clauses which indicate these relational meanings express speakers' attitude toward the proposition of the sentence.

Finally, preceding-clauses which indicate <comment on relation> have a comparative expression. This arises from the above feature (3).